地域文化研究部門選評

國學院大學 文学部 教授　大石　泰夫

■総評

地域の伝統文化に学ぶコンテストの趣旨は、高校生たちが自分たちの周辺に継承されている「伝承文化」に、自主的に目を向けて課題を決め、その内容を実地で調べたり、体験的に学んだりしてリポートとしてまとめる。そして、それを進めることによって高校生たちが、地域文化の実態とその存在の意味を捉え、地域文化の今後のあり方を考える、という視点から特に優れたものを顕彰して、こうした取り組みの質を高め、活発化してゆこうというものです。

では、どういう評価基準で取組やリポートを評価するのかというと、

1．問題発見や着想の上での独自性
2．情報収集の上での直接性や確実性
3．情報整理の上での論理的工夫や努力の跡
4．立論の手順における論理的実証性
5．結論としての新たな知見の明確性

というようになります。

伝承文化は生き物です。過去において消えてしまったのであるなら、それは何故なのか。今も伝承されているのはどうしてか。そういう問いに基づいた新たな知見につながる取組を、高く評価してきました。このコンテストの趣旨は毎年同様であり、基本的に評価基準も変えずに評価してきました。

しかし、今年はコロナ禍という状況で、「２」の直接性や確実性の担保が難しく、ネットでの調査に終始していたり、相手への配慮から、対面での調査が困難であることが予想されました。

しかし、高く評価されたものは、こうした状況の中でも、文献調査において歴史や伝承の調査を行った上で、フィールドワークを実施して、そうした伝承文化を実感するとともに伝承者の思いをしっかり受け止めて、それを自分たちでどのように考えていくのかといいうことを積極的に発信しているものでした。

現代はネット情報で相当詳しい情報を入手することができます。しかし、人が続けている伝承文化は、肌で感じて具体的に立論したものであることが大切なのです。コロナ禍の中でも、そうした取組がしっかりなされたことを、何よりもうれしく思います。

こうした基準は、どんな研究にも敷衍できるものです。これからも、このコンテストに限定されるのではなく、この１～５の評価基準を参考にして、このような実際的な学問探究が若い人たちによって積み重ねられていくと､学問の将来も大きく開けていくでしょう。

みなさんのさらなる研鑽を、心から期待したいと思います。

■団体の部

優秀賞

「みなべ・田辺の梅システム　400年とこれから」
和歌山県立田辺高等学校
みなべ・田辺の梅システム研究会

みなべ町・田辺市は梅の産地として有名で、町のあらゆるところに梅の文字が見受けられるところです。この取組は、梅がこの地の産業として展開しているシステムを明らかにするとともに、その産業が世界へ展開する可能性を考えようとしたものです。特徴的なのは梅栽培と梅干をとりあげるだけでなく、梅林のそばにはもう一つの伝統産業である薪炭を作るための薪炭林が広がり、そうした自然環境が梅林の有機物補給の役割を果たすということから、この調査も詳細に行っていることです。また､日本の伝統食としての梅干が、外国人にどのように感じられるのかをアンケート調査してとりまとめることによって、梅干の海外展開を模索するという試みもされています。

優秀賞

「未来へつなぐ地域資源
～伝統食材の保存と普及を目指して～」
群馬県立勢多農林高等学校
植物バイオ研究部

神流町の在来品種「あかじゃが」と「アワバタダイズ」を、農林高校の研究部らしく実際に栽培し、それに用いられる伝統農具などを確認して、その中の一つ

を聞き書きから復元することなどを試みています。また、農家に伝わる郷土色や伝統食を調査し、自分たちで作っています。

加えて、「あかじゃが」と「アワバタダイズ」を組み合わせた新商品（食品）開発として「奥多野みそ」と「万葉豆腐」を開発、またイベント用の新商品「あかじゃがコロコロ」「あかじゃがチーズドッグ」を開発して購入者にアンケートをとり、その結果を報告しています。さらにこの二品種の新たな栽培技術も試みています。

今回の取組は、伝統文化を調査研究するというより、伝統的な品種をいかにして現代に活かすかということを、様々に試みたものといえるでしょう。

佳作

「2019年度 地理歴史部民俗調査 東白川村」

奈良・帝塚山高等学校

地理歴史部

岐阜県加茂郡東白川村において行った民俗調査の報告です。いわゆる「民俗誌」ですが、自治体などが行う集落の総合的な民俗誌の報告書とは少し異なり、東白川村の特色である「廃仏毀釈」と「地歌舞伎」がまず冒頭に記され、その後「農業」「林業」「畜産」と生業を報告し、その後に「年中行事」を記して、最後に「その他」として東白川村の概況と現代的な事項が報告されています。総合的な民俗誌とはなっていませんが、地域の特色が強調された報告書になっています。

佳作

「知られざる北伊豆地震と朝日町長

～朝日町長の対応は復旧ではなく復興だった～」

静岡県立沼津城北高等学校

情報メディア部　災害研究班

昭和５年（1930）11月26日に起こった北伊豆地震の復興に関わった三島町長朝日原作氏の事績を、文献調査とフィールドワークで明らかにした取組です。実際に、現在も三島市内に残された朝日町長に関わる事物・遺跡を丹念に調べ上げ、元に戻す「復旧」ではなく、新たに町作りをする「復興」と主張しています。災害後をどう考えるか、示唆に富んだ調査となっています。

■個人の部

最優秀賞・折口信夫賞

「屋久島民謡『まつばんだ』を後世に伝える方法」

鹿児島県立屋久島高等学校

寺田　雅

屋久島に伝わる民謡「まつばんだ」について、多角的な調査と積極的な発信活動を行って、これを伝承するための方法を考えた取組です。

具体的には、「まつばんだ」の認知度と普及活動を調べる取組として、インタビュー調査とアンケート調査を実施し、前者についてはインタビューとともに琉球音階を調査して詳細に説明するとともに、起源などにも言及しています。アンケートは439人に対して実施し、その中間報告を高校文化祭で行うとともに、その結果を踏まえて、講演会やイベントで普及活動を行うといった方法ではなく、自然な形で住民生活に寄り添い、伝わる方法をその効果を検証しながら行っていくという結論を述べます。

そして、取組はそこで終わることなく、町内放送で「まつばんだ」を流すことを一つの方策として考え、そのために聞きやすい音源を作り、屋久島町役場でプレゼンテーションを行っています。

また、「まつばんだ」を知るために研究論文も参照するなど、専門的な調査の点でも優れた取組であると評価されました。

優秀賞

「『無尽』がつくる山梨のコミュニティを探る！！」

山梨県立甲府東高等学校

竹井　愛

「無尽」という、かつては全国の非常に広い範囲で伝承されていたコミュニティの伝承について、今日でも伝承されている山梨県の事例を調査し、今後の課題を提言している取組です。約20人に対する聞き取り調査を実施し、細かな質問内容と聞き取りの結果を報告して、考察を記しています。また、「無尽」が現在でも伝承される山梨県ということから、その理由を県民性に求めて考察しています。最後には「無尽」を継続することについての現代的な課題とともに、対策を記しています。

珍しい手書きによるレポートですが、色マーカーを効果的に使い、円グラフや手書きのイラストなども効果的に使われていることも評価されました。

優秀賞

「わんどの津軽の楽器の魅力ば知ってげじゃ」

青森・五所川原第一高等学校

古川　弥音

地域に深く定着し、応募者自身が小学校3年生から部活で弾き続けてきた津軽三味線についての歴史を調べるとともに、津軽三味線の若い全国でも有名な奏者5人に聞き書き調査を行って報告しています。津軽三味線成立までのことが、わかりやすくまとめられており、若者の津軽三味線に対する意識が明確に記されるレポートとなっています。津軽三味線が、若者の奏者によって、民謡ばかりでなくJ-POPなどを演奏する試み、SNSなどでの配信、オリジナル曲の創作、カルチャー教室での普及活動など、現代社会に伝統楽器の現代的な活用が興味深く記されています。

佳作

「夏の写し絵」

岐阜・済美高等学校

森　幸成

錦絵「麻疹退治」が「朝日新聞」コロナ禍に関わって取り上げたものを読んだことをきっかけにして、麻疹・はしか・コレラ・流行病を扱った錦絵の情報を集めてまとめた取組です。そして、錦絵を通じても、感染者に対する差別が表現されていることについて考察をしています。

佳作

「神社には地域を活性化させる事ができるか
～埼玉県志木市敷島神社のケース～」

東京・渋谷教育学園渋谷高等学校

岡田　真奈

地方が過疎化していくことについての分析研究を踏まえ、自立的かつ持続的で魅力ある社会を作り出すことに神社が寄与し、地域を活性化させることができるのかという問いを明らかにするために、志木市の敷島神社を調査して分析した取組です。調査・分析の中心となったのは、この神社の夏祭りで、地域住民の精神的豊かさの創造という面に注目しています。

佳作

「温故知新―埼玉県秩父市の伝統文化から考える―」

東京・海城高等学校

島村　昂寿

表題は伝統文化について論じるもののようですが、秩父の夜祭りと、秩父を舞台にして描かれたアニメがアニメツーリズムといった展開を示していることを調査記述し、伝統文化と現代文化の共存という視点で秩父の文化を捉えようとする取組です。対照的な文化が秩父に共存していることから学ぶことが、指摘されています。

地域文化研究部門選評

国立歴史民俗博物館　名誉教授　常光　徹

■団体の部

優秀賞

「みなべ・田辺の梅システム　400年とこれから」

和歌山県立田辺高等学校

みなべ・田辺の梅システム研究会

高品質の梅を数百年にわたって生産し維持してきた「梅システム」とは何か、について考察したもの。薪炭林・梅・生物多様性の３つの観点から解明を目指している。史資料を駆使して紀州備長炭の歴史を描き、炭の生産工程を詳細に報告。梅についても、南高梅が誕生するまでの歴史を押さえた上で、現地調査をもとに白干し梅の作り方を詳しく説明。一見、関係ないかに見える梅畑と周囲の薪炭林が、実は相互に影響し合って生物の多様性を育み、土壌の流出防止や有機物補給の役割を果たしてきた。長い歴史を紡いできた梅システムの背景を明らかにした力作。

優秀賞

「未来へつなぐ地域資源

～伝統食材の保存と普及を目指して～」

群馬県立勢多農林高等学校

植物バイオ研究部

地域の伝統文化を生かして、高齢化の進む町の活性化に取り組む活動の記録である。かつて本研究部が発見した在来のあかじゃがや、地元で栽培されてきたアワバタダイズに注目し、これらが郷土料理としてどのように利用されてきたのか、農家を訪ねて調査を実施。それをもとに、料理教室を開催して具体的な検討を進め、新たな工夫を凝らした新商品の開発を試みている。伝統食材の継承と創造といってよい。広く普及することを目指した実践も多彩である。また、伝統的な農具の調査や、安定した収穫を得るための栽培技術についても述べられていて、読み応えがある。

佳作

「2019年度 地理歴史部民俗調査 東白川村」

奈良・帝塚山高等学校

地理歴史部

岐阜県加茂郡東白川村の民俗調査にもとづく報告書である。全体は、１廃仏毀釈、２地歌舞伎、３農業（お茶・トマト）、４林業、５畜産、６年中行事、７その他（村の概要・村おこし・教育）から構成されている。周到な下調べをした上での調査だけに、いずれのテーマも内容が充実している。なかでも、木曽を代表する林業については、江戸時代から現代までの歴史を詳細に記述し、今日の東白川村が置かれている厳しい現状と、新しい展開を模索する状況を描いていて興味深い。

佳作

「知られざる北伊豆地震と朝日町長

～朝日町長の対応は復旧ではなく復興だった～」

静岡県立沼津城北高等学校

情報メディア部　災害研究班

1930年に発生した北伊豆地震は、静岡県東部に甚大な被害をもたらした。三島町（現三島市）は、どのような復興の道を辿ったのか。その舵取りをした朝日原作町長の対応に注目したレポートである。地震に関する詳しい記述から、深刻な被害状況が読み取れる。朝日町長は、家屋の倒壊を機に道幅を一挙に広げるなど、単なる復旧ではなく、町の将来を見据えた大胆な構想を打ち出す。反対する住民もしだいに心を開いていく。朝日町長の情熱と実行力が伝わってくる内容である。

■個人の部

最優秀賞・折口信夫賞

「屋久島民謡『まつばんだ』を後世に伝える方法」

鹿児島県立屋久島高等学校

寺田　雅

忘れ去られようとしている民謡「まつばんだ」を、身近に感じてもらうにはどうすればよいのか。方法を模索しながら、実現に向けて活動してきた記録である。アンケートの分析から、民謡に対する人々の意識を分析し、その実態を浮き彫りにする手法は鮮やかである。インタビューでの意見を参考にしながら、住民の生活

に寄り添い自然な形で伝わっていく方法が大切であると確信する。親しみやすさを念頭に置いた楽譜や音源の工夫、町内放送で流すための働きかけなど、計画を行動に移していく実行力は見事である。視覚が優先する現代に、故郷を聴覚に刻み込む取り組みといってよい。

優秀賞

「『無尽』がつくる山梨のコミュニティを探る！！」

山梨県立甲府東高等学校

竹井　愛

日頃見聞きする「無尽」について、その仕組みや活動の実態、山梨県民の特徴などについて調べたものである。参加者への聞き書きだけでなく、毎月の会合の場を提供している食堂の経営者から見た「無尽」の姿を描いていて興味深い。「無尽」の機能として、人がつながって生きることを満たす絶好の機会であり組織である、という指摘は示唆に富む。「無尽」は山梨県でとくに盛んだが、ただ、参加者は減少しているという。今日の「無尽」が抱える課題と今後の展望が具体的に示されている。愛さんのお父さんも参加しているという、身近な話題に取り組んだ着眼点がよい。

優秀賞

「わんどの津軽の楽器の魅力ば知ってげじゃ」

青森・五所川原第一高等学校

古川　弥音

津軽三味線誕生までの歴史と、津軽三味線の演奏に携わっている若者たちの現状を報告している。中国から渡来した三弦が琉球王国で三線となり、さらに堺に伝えられ、三味線が誕生するまでの歴史を述べ、三味線の種類と特徴を分かりやすく説明する。つぎに、津軽三味線誕生のきっかけとなった仁太郎の不屈の人生を描く。現在、各地で津軽三味線を弾いている若者たちへのインタビューでは、始めたきっかけ、その魅力、津軽三味線から学んだことなどを紹介していて充実している。古川さんの津軽三味線に寄せる熱い思いが伝わってくるレポートである。

佳作

「夏の写し絵」

岐阜・済美高等学校

森　幸成

文久２年（1862）の麻疹の大流行時に作られたはしか絵を読み解き、これらの錦絵が伝えようとしたものは何か、について考察したもの。麻疹の流行に対峙した幕末と、新型コロナウイルスの感染に直面する現代を比較し、治療法の確立されていない感染症に対する共通の心意を浮き彫りにしている。未知の病魔が引き起こす危機は、しばしば差別を生む。根絶することはできないかもしれないが、傍観したり諦めてはならないと主張する。はしか絵を素材にして現代を考える発想が新鮮である。

佳作

「神社には地域を活性化させる事ができるか
～埼玉県志木市敷島神社のケース～」

東京・渋谷教育学園渋谷高等学校

岡田　真奈

タイトルが本レポートの主題を端的に物語っている。この問いを解くために、神社の歴史や地方の現状、地域活性化の問題点などを手際よく整理する。その上で、敷島神社の関係者に夏祭りについてインタビューを実施し、祭りを支える人々の活動を描いている。人と人との繋がりと協力関係の大切さがよくわかる。こうした手続きを経て、活性化は「地域住民の精神的豊かさの創造という面で可能である」との結論を導き出している。構成がしっかりしていて文章もわかりやすい。

佳作

「温故知新―埼玉県秩父市の伝統文化から考える―」

東京・海城高等学校

島村　昂寿

秩父市の伝統文化とアニメの「聖地巡礼」に代表される現代文化は、相互の関係性のなかでどうあるべきか、について考察したものである。一章で、秩父夜祭と秩父神社を中心に詳しく解説。二章では、秩父を舞台にしたアニメと「聖地巡礼」による観光の現実を報

告。それを受けて、三章では、伝統文化を現代にどう生かすべきか、守るべきものと変化していくものに、自覚的に向き合う姿勢の大切さを述べている。不易流行に通ずる見方といってよい。文章も簡潔で読みやすい。

■総評

新型コロナの影響で日々の行動が制約されるなか、応募状況が心配でしたが、今回も質の高い作品が揃いました。団体の部優秀賞の田辺高等学校「みなべ・田辺の梅システム　400年とこれから」は、梅と炭という一見異質なものの間に機能しているシステムに注目した考察で、民俗文化を捉えていく大切な視点といえるでしょう。個人の部最優秀賞・折口信夫賞の寺田雅さんの「屋久島民謡『まつばんだ』を後世に伝える方法」は、アンケートを分析する高い能力と、それを実行に移す行動力が光る内容です。昨年の中島渚君につづいて、屋久島の民俗を対象にした大きな成果です。森幸成君の「夏の写し絵」には、はしか絵を素材に現在を読み解く鋭い視点を感じました。民俗学の根底には、私たちの目の前にある疑問や関心が横たわっています。伝承といういとなみに注目しながら、歴史的な移り変わりの姿や、そこにこめられた人々の知恵・技術・心意などを明らかにしていくところに特徴があります。これからも、身辺に生起する出来事に関心を持って取り組んでください。